

コミュニティにおける「場」

— 「場」概念の再考と実践研究への応用に関する考察 —

Ba in the Community Context

— A Reconsideration of the Concept of *Ba* and Discussion of Its Applicability in Practical Studies —

河野 秀樹
Hideki KONO

Keywords : *ba*, community, self-organization

キーワード : 場、コミュニティ、自己組織

1. 導入

近年、国内での様々な地域、集団における活動のなかでの、「つながり」、「絆」、「居場所づくり」といった、個人間や集団単位の情意的結びつきに基礎づけられた関係性を改めて肯定的に評価する価値志向が、当事者およびそれらを取り上げるメディアのあいだで顕著となっている。とくに、ここ数年の動きとして、いわゆるコミュニティデザインを通じた、地域の様々な社会的資源の再発見と発信への自助的な活動の実践（山崎, 2011）、比較的若い世代を中心とした、地域の魅力を独自の視点でとらえ、地元の人々と関わることで自己肯定感や生きがいを見いだそうとするローカル志向の高まり（指出, 2016）、地域のオープンスペースや多目的空間を利用した交流の場づくりの動き（坂倉, 2010; 柴田, 2017; 山納, 2016）など、様々な単位での当事者間の自律的な関係構築への志向と実践の拡大が見てとれる。

こうした特定の場所を基軸とした個人や地域単位での自発的实践を通じたつながりは、なんらかの地域性と共同性を有している点で、広い意味でのコミュニティにおける関係構築と位置づけ得る¹⁾が、そうしたコミュニティ活動の展開について当事者によりしばしば共通して用いられるキーワードの一つとして「場」が存在する。たとえば、山納（2016）は、いわゆるサードプレイスにおける魅力ある他者との出会いを通じた継続的關係性が成立している状態を「場」ととらえ、その持続や創発性発揮の条件などを事例とともに論じている。また、中村ら（2017）は、様々な業種の人々が共有するコワーキングスペースで働く集団をコミュニティと見立て、自ら「場づくり」と呼ぶ、そこでの相互作用から生まれる創造性を高めることをテーマとした事業展開をおこなっている。さらに、都市型の「場」づくりとして、主にテーマ型イ

メントを通じた個人間のつながりをファシリテートする活動などが、徐々に認知されてきている。

筆者は、人間の集団における包括的関係性の生成原理、およびそうした関係性の枠組みとしての「場」の作用の外延の探求を、継続した研究テーマとしてきた。本論では、その新たな試みとして、こうした現代型のコミュニティにおける「場」づくりブームとも言える風潮のなかで、コミュニティに生成する「場」とはどのようなものか、それはこれまで筆者が前提としてきた生命科学的「場」の概念とどう整合しうなのか、さらにそうしたコミュニティにおける「場」のあり方を論じることの意義とはなにかについて、関連理論と実践事例を引用しつつ考察をおこなう。

2. 問題の所在と研究の目的

これまで筆者は、主として清水（1990, 1999, 2000）の生命科学的知見にもとづいた「場」の理論を拠り所として、人間のつくりだす「場」を、個人からなる集団内にマクロな秩序としての社会的文脈性を創出する原理、もしくはそうして形成された関係性の枠組みにとらえ、「場」の作用のあり方を論じてきた（河野, 2010, 2011, 2012）。この「場」のはたらきを扱う関連理論では、人間を含む生命要素の集団が、何らかの統御主体からの働きかけによらず、自律的にそうした関係性を生成する点で、自己組織性を生成原理上の特質としている²⁾（清水, 1999, 2000; 西口・ボーデ, 2000; 三輪, 2000）。一方、こうした「場」の生成プロセスには、要素間の動的関係性に加え、集団がおかれた環境条件も大きく影響する（清水, 2000, 2003）。この点で、「場」の生成とは、系のおかれた環境に適應すべく、外部の状況に関する情報を取り込みながら、内部の要素間の関係性を系自らが動的に調整していくという、開放系における動的プロセスであり、系内部の固定的関係のみに帰結されるものではない。このことは、人間の集団における「場」の生成においても、それがおかれた物理的および社会的環境に応じ、集団内の構成員間の関係性も変化していくことを意味する。

こうした「場」の理解をうけ、筆者は主に、共有された物理的空間に存する個人間に生成する「場」的原理による関係生成のあり方についての理論的考察と、そうした関係生成の様態の記述法を模索してきた。一方で、冒頭に挙げたような、コミュニティにおける一定の時間軸をもつ活動において、「場」的原理による関係生成と共創的行為が成立しうるか否かについては、後述する理由からこれまでのところ筆者自身は研究の対象とはしてこなかった。そこで、本論考では、なんらかの地域性と共同性をもちながら、構成員の交替が起きうるだけの時間的範囲をもって自発的な活動を展開する個人の集合体としてのコミュニティ内に、自律的な関係性の生成と協働による創発的動きが見られる場合、その成立のメカニズムを筆者の依拠する「場」の理論により説明することは可能であるのか、すなわち、非同期的な参画状況におかれた構成員のあいだに、通時的に生成する「場」は存在しうるのかについて、事例を引きながら理論的検証をおこなうとともに、コミュニティの文脈へのそうした「場」理論の適用の意義についても考察する。

3. 生命科学的「場」の生成メカニズムと生成プロセスの機能的特質

生命システムにおける多様な要素間の自律的な関係生成原理としての「場」の概念を、科学的知見にもとづいて整理し詳述した研究者として清水博が知られている。清水（1999）によれば、生命要素の集合体である生命システムは、自己言及的な創出性をその本質的特徴の一つとしてもつ。それは、生命システムが、絶えず変化する環境に対応すべく、自身にとって意味のある情報を内的原理により自らつくり出すことで、自己自身を創出し、表現していくことを指す。このことを機能的側面から見た場合、そのプロセスは、一般に自己組織化現象として言及される、システム自らが系全体の秩序を自律的につくり出す現象にあたるが、ここでいう秩序とは、要素間の動的協働性を通じてそのふるまいのあいだにコヒーレンス（整合性）が生まれ、その結果系全体としての文脈性が創出されることを指す。これは、たとえば多細胞生物における形態形成や損傷部位の再生が、生命要素としての細胞間の動的協働性を通じて自律的になされる事実に見られるように、生体が共通に持つ基本的特質であり、生命要素としての個人からなる人間集団にも、同様の自律的な関係生成とそれにもとづく協働的創発である共創が成立しようと、清水（1990, 1999, 2000）は論じている。

システム全体にそうした文脈性を生み出すためには、システムの構成要素間だけでなく、各要素とシステム全体とのあいだにも整合的な関係性を生み出す必要が生じるが、その際、個々の要素が、無数の可能な選択肢からその「場所」すなわち状況に整合するよう自らのふるまいを決定するうえで準拠するのが「場」の情報である。「場」とは、生命要素の集団がそうしたマクロな秩序を生み出すプロセスをとりもつはたらきであり、機能的には全体の秩序を生むために個々の要素のふるまいを限定する拘束条件であるとともに、意味的には集団により共有される包括的な関係性の枠組みを指す（河野, 2017）。

清水の「場」の概念では、「場」の作用として系に存する個々の生命要素にトップダウンのかたちで伝達される「場」の情報は、人間の集団の場合には構成要素としての個人により共有された状況である「場所」のイメージとして自覚され、個人はそうして把握した状況的文脈に合致すると同時に、そこに存する他者のふるまいとも整合するよう行為（自己表現）する。その結果、「場所」の文脈性は全体としての意味的一貫性を増し、そうして精緻化された「場」が、再び個人に行為の指針となるべき状況的文脈性に関わる情報を伝えていく。こうして、清水が「ホロニックループ」とよぶ、個人による集団全体の文脈性の把握と個人の行為とのあいだの循環的プロセスが自律的に進むことで、集団の秩序は調和性を増すとともに、全体的文脈性の歴史的創出がおこなわれるのである。

清水（1999）は、あるシステムに秩序が自己組織されるための一般的条件として、(1) 構成要素自らが他の要素に働きかけてシステムに起きている反応を連鎖的に強めていく自己触媒性を有すること、(2) システム内に一定の不安定性（ゆらぎ）が存在すること、(3) マクロな秩序を生むためにシステムが構成要素のふるまいを限定するはたらき（拘束条件）が機能すること、の3点を挙げているが、各要素が個別な特異性を持ち、かつその性質を変える生命シ

システムでは、この条件を単純には応用できないと述べる。むしろ、生命システムの自律的な秩序生成の理解において着目すべきは、多様で可変的な生命要素間の関係性のダイナミズムも視野に入れた「共創的な自己創出」(p.108)がいかにか起きているかである。

この生命システム内での共創的な秩序の自己組織の存在を同定する拠り所として、清水(1999)は「秩序パラメータ」としての「場」の作用の表出³⁾がみられるかどうかと考えられることに言及している(p.52)。現象面でとらえたとき、それは、システムの状態に一定の秩序をもったパターンが自律的に生成している状態を意味するが、清水は、その具体的な表出のあり様を、構成要素が協働的に演じる「即興劇」としての集団独自の文脈性の創出が、共有された仮説的シナリオに従って進行している状態に準える。その態様を清水は次のように描出する。

そのストーリーは単に自己中心的自己⁴⁾の表現生成(演技)を包摂するばかりでなく、それがゆっくりと変化するということから、その表現に対する拘束条件として働いて、役者の表現に外枠を与える働きをします。したがって役者が何人も集まっておこなう即興劇での自己表現では、各役者の境界として刻々と生成されるストーリーが集まって統合されて、役者全体に共通するシナリオとなって次々と進むこと、これが[秩序の自己組織の]十分条件なのです。(清水, 1996, p.73) ([]内補足は引用者による)

つまり、この論理に従えば、人間の集団の場合、外部からの統御によらず、何らかの集合的な文脈性が、その様態を変えつつも、独自の機能と行動様式をとめないながら、一貫したストーリーとして自律的に生成、展開していく事実が見られるとき、そこには「場」的原理によるマクロな秩序の表現パターンとしての集合的文脈性の自己組織が起きていると見なしてよいといえる。

本論では、こうした「場」を介した秩序の自己組織としての自律的な集合的文脈性創出の原理が、本論で想定するコミュニティ内での通時的な関係構築にも適用されうるかを、自己組織論への社会学的アプローチからの知見を援用しながら論じていく。

4. 現代社会システムにおける関係性の自己組織

今田高俊(1986, 1994, 2005)は、社会学の立場から、現代の社会および社会的営為にみられる、自己言及的なメカニズムを通じた秩序形成と、システムとしてのそれらの変容のあり方を、自己組織の概念を用いて体系的に論じている。今田が「社会変動」の代わりに「自己組織性」の概念を用いるのは、社会の変化を担う主体はその構成要素である個人であり、「個々の人間が社会をつくり替えていく側面を強調」(今田, 1994, p.103)するためであるが、そこには、高度経済成長下での社会全体の発展に奉仕する個人像を前提とした「秩序ある繁栄」から、成熟し安定・停滞した社会での「活力ある安定」への転換において、個人の独自で主体的

な活動が全体の変動の重要な要因となってきたという、社会変化の原理そのものの変遷についての理解が存在する。

今田（1994）は自己組織性を、「システムが環境との相互作用を営みつつ、みずからの手でみずからの構造をつくり変えていく性質」（p.104）の総称概念と定義するが、物質界にも散逸構造などのかたちで見られる自己組織と比較し、人間社会に独自に見られる自己組織現象の特徴とは、個人による社会認識を通じてシステムが再組織していく点にあるとする。すなわち、物質界での自己組織は、最終的な秩序解のあり方が確率論的に決まる場合であっても、その分岐の数は確定的であるのに対し、人間社会の場合どのような分岐としての行動の選択肢が存在するかが事前に確定できず、再組織のあり方が状況と個人によるその認識に依存して多様となる（p.7）。このことは、清水の生命科学的な「場」による秩序形成が、生命要素のもつ「場所」の状況に応じ自己の性質と他の要素との関係性を変える能力に依拠していることと符合する。つまり、現実の生命システムを構成する要素は、分子生物学が指定するような、一分子に対し一機能のみ与えられることでシステムの状態が一義的に決まるという要素還元的な論理によってではなく、内部に異なる機能を潜在的に持つ要素が、その内部状態を他の要素との関係性に従って変化させながら、システム全体に「多様で多義的な秩序」（清水, 1990, p.276）を生むようふるまっているのである⁵⁾。

今田（2005）によれば、自己組織性には、サイバネティクスの制御論に依拠する、所与の構造を基盤とした環境適応的な自己組織性とは別に、人間が持つような自省作用を基礎とする「遂行的自生的」な自己組織性が存在する（p.117）。一般にシナジェティクスとして言及される後者の自己組織性は、システムが自己を再生産するために自身による働きかけを必要とするという自己言及性に加え、システム内に生じるゆらぎの増幅を通じ、新たな秩序が形成される自己触媒性をその成立要件として持つことを特徴とする。平衡状態からのズレであるゆらぎを肯定するこの自己組織性は、システムの安定を目的とする制御図式にもとづくサイバネティクスとは異なったパラダイムを持つ。

社会現象におけるシナジェティックな自己組織性では、ゆらぎは「既存の枠組みには収まりきらない、あるいは既存の発想では処理できない現象」（p.19）として定式化しようが、そうしたゆらぎはシステムの創発情報となるものであり、とくにシステムが不安定な状態にあるときには、自己言及性としての自己触媒作用を通じこの挙動に他の要素が引き込まれて大きくなりとなる。ただし、複数存在するゆらぎのうちどのゆらぎに要素が引き込まれるかは事前には決定できないため、そこには偶然要因が入り込む。シナジェティックな秩序の自己組織における主要な特質は、このゆらぎを引き金としてシステムの構成要素が協力的に行動し、巨視的なパターン形成をおこなう（p.28）ことにある⁶⁾。

今田（1986）はこのシナジェティックな自己組織性を、主に社会政策の転換などの比較的規模の大きな社会現象と関連づけて論じている。上述したとおり、今田のいう自己組織とは、社会システムが自省作用を通じて自らの構造を変えていくプロセスであるが、それはすなわ

ち、システムが自身の中の混沌的多様性を受容し、何らかのゆらぎを契機として内部の秩序変換をおこなっていくプロセスにはかならない点で、清水のいう生命要素間の協働を通じたシステムの動的秩序の自己組織と機能的に同義である。

社会システムの自己組織については、すでにルーマン（Luhmann, N.）らがオートポイエーシスの概念を援用し、社会の構成と進化の理論として論じているが、ポストモダン社会における社会システムの自己組織の原理を、多様な個人による個性化への志向（差異動機）におき、それぞれの生活における意味充実のための行為に関連づけて論じた今田の自己組織論は、本論で扱う「場」を通じた秩序の自己組織と原理上高い整合性をもつとともに、コミュニティという社会システムの形態への「場」理論の適用可能性への理論的傍証と見なしうる。今田については、後節で具体的なコミュニティにおける「場」的原理による関係性の自己組織の条件についての議論で言及する。

5. コミュニティ概念についての本論における理解

コミュニティにおける「場」を介した関係生成のあり方を論じるに先立って、本論におけるコミュニティの概念整理をしておきたい。「コミュニティ（community）」の概念を学術的文脈で詳説した先駆であるマッキーバー（MacIver, R. M.）は、同概念を、村落、都市、国民社会などの地域性にに基づき、人々の共同生活が営まれる生活領域を指すとし、任意の目的のために意図的に形成される機能集団である「アソシエーション（association）」と区別している。彼の概念にしたがえば、コミュニティは一定の地域性を持ちながら、人間の共同生活を成り立たせる構成要素とそれらの諸関係を包摂する複合的全体である。そうしたコミュニティの形成と維持は、社会制度によってよりも、成員による共同関心と共同意志の共有という、内的動機によって支えられている（MacIver, 1917⁷⁾。個人は、そうした共同の関心を軸に相互に接触しつつも、それぞれの関心、意志にしたがって「コミュニティの器官」としてのアソシエーションを構成し活動するが、そうした関係性と活動のすべてがコミュニティ全体としての共同生活領域を構成するとする。彼のコミュニティ概念は、その後のコミュニティ研究を基本的に方向付けるものであった（松本, 1975）。

船津・浅川（2014）は、マッキーバーの他、コミュニティを一定の地域において「共生」する人々の集合としてとらえたパーク（Park, R.E.）などの概念にもとづき、コミュニティを、「地域性」という空間的範囲と、人々が生活を共にするという「共同性」を柱として成り立つ人々の集団ととらえ、コミュニティとしての「社会構造」、「社会的相互作用」、「住民組織」、「コミュニティ・イメージ」、「コミュニティ意識」、「コミュニティ文化」、「コミュニティ・メディア」、「コミュニティ・コミュニケーション」を構成要素として、成員自らが作り上げていくことをその特質として挙げている⁸⁾。

広井（2009）は、コミュニティを「人間がそれに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないし相互扶助の意識が働いているような集団」（p.11）と

定義したうえで、現代の日本においては、ポスト産業化と高齢化の進行に伴い、個人と地域との関わりが強まることで「空間型コミュニティ」である地域コミュニティが機能的重要性を増すとともに、それらと「時間型コミュニティ」と呼ばれる、NPOや協同組合など特定のミッションないしはテーマを基軸として形成される、都市型の「ミッション型（テーマ型）コミュニティ」との融合が、大きな課題となるとしている。

これらのコミュニティ概念についての知見をふまえ、本論では今日の日本社会におけるコミュニティを、一定の空間的範囲を中心に展開する通時的活動に、任意の期間自発的に参画する複数の個人により形成され、それらの成員の協働的行為を通じ醸成される共同性の認知の共有により結びついた集団ととらえ、そうしたコミュニティにおける関係性の生成上の特質と「場」的原理との整合性を、事例を引きながら検討、考察する。

6. 局所的「場」からコミュニティにおける「場」へ

先に触れたとおり、筆者はこれまで個人間に生成する「場」的原理によると見られる関係性の様態を記述すべく、共時的に活動空間を共有する集団を対象に定性的研究をおこなってきた。そのうち、河野（2012）では、清水らの場の理論に基づき、「場」を介した関係生成の機能上の条件となる項目を指定し、これらが適用される状況の存否を「場」的原理による関係生成の存在を識別するうえでの有効な指標として提示している。それらは、①各個人が自己のとるべきふるまいについて一定の決定権を持ち、他の構成員と対等な立場で自己表現をおこなっている、②各個人の表現が他の構成員と整合的となるよう自己調整され、集団全体としての表現に寄与している、③個人間で身体性を介して、暗黙知のような非記号の情報の共有がおこなわれている、④活動の方向性が構成員に内面化され、当事者としての立場から理解されている、の4点である。

これらの条件は、「場」的原理のはたらきを同定するための必要条件と見なしうるが、筆者は、職場における多文化集団の協働（河野 2012）や、多様な生活背景を持つ参加者による集団参加型イベントにおける文脈性創出の様態（河野 2018）などを対象におこなった聞き取りや観察による調査を通じ、同条件との整合度をみることで、それらの事例に関し、「場」的原理による関係生成の存否の検討をおこなうとともに、その様態の記述を試みてきた。

筆者が、上述したように、共空間における「場」の生成という、いわば局所的に生成する「場」を対象を限定してきた理由としては、上に挙げた特質のうち、②、③および④の適用可能性を考慮したところが大きかった。すなわち、関係生成の当事者が、対面状況などのような、時間と空間を共有し共時的にコミュニケーションをとりうる状況にある場合は、まず②の集団全体の文脈性に照らした自己と他者の表現（行為）の整合を図っていくという、相互の表現のすり合わせに必要な認知機能を行使するための環境的条件が担保されていると考えられた。具体的には、共空間にあっては、視覚、聴覚などの知覚を通じた他者の行為のリアルタイムの把握が可能であり、かつ、そうした認知にもとづいた行為の結果が全体の文脈性にどう反

映されたかも即時的に把握されうるため、「場」的原理による関係性の生成の事実が当事者および観察者にとって確認しやすいといえる。

また、同様に③についても、個人に「場所」(状況)の様態を直接的に伝達する「場」の情報が、記号化、対象化のできない暗在的情報であり、個人は「場」の作用のなかに身を置くことで自らの身体に映し出すかたちで「場所」の状態を把握する(清水 1996, 2000)とされることから、「場」的原理による包括的關係性の生成において、共有された状況的要因の直接的覚知にあたっては、物理的に時間と空間を共有する個人のあいだでのほうが、「場」の情報の共約度は高まると想定されること、さらには、集団全体の秩序としての文脈性を生むための個人間のやりとりでも、生体リズムの同期や感覚・情意面での同調といった、間身体性にもとづく共時的なコミュニケーションが重要な機能的役割を持つと考えられること(河野, 2011; 露木, 2003)から、やはり直接的覚知を通じた状況や他者のふるまいの様態の把握が可能な共空間内に生成する「場」を対象とした方が、自律的な関係生成プロセスの実相が掴みやすいとの判断があった。

さらに、④の共同行為の目的や意味といった活動の方向性についての共通の認識の内面化については、集団としての活動期間の長短はあれ、活動空間を共有していることで、言語化された情報以外のいわゆる暗黙知の授受にもとづくビジョンの共有が起きやすい(伊丹, 2005; 野中・紺野, 1999)とされることから、まずは共空間という局所的な環境条件を前提とした「場」の作用に対象を限局することが必要と考えた。

このように、筆者がこれまで「場」を介した関係生成の存在の同定と、その様態の記述の対象としてきたのは、当事者による他者のふるまいと共有された状況的要因の直接的覚知が可能と思われる時空間にとどまってきたわけであるが、冒頭で触れたように、コミュニティと見なしうる集合体のあり方を語るうえで、「場」というキーワードが多用される現状にあって、「場」への言及が単なる通俗的な意味付けのもとにおこなわれている面も認められる一方で、そうしたコミュニティに存在しうる「場」にも、先述した生命科学的原理にもとづく生成論理の適用可能性は否定できない。次節以降では、現代におけるコミュニティの基本的性格をふまえたうえで、それらにおいて、何らかのかたちで包括的な関係性の生成と、それにもとづく集成的文脈性の創出が自律的に起きていると見なされる事例を参照しながら、それらが「場」的原理によるものかどうかを、上述の同原理による関係生成の特質との照合により考察したい。

7. コミュニティにおける関係生成事例と「場」的原理との整合性

本節では、「場」を介した自律的な関係生成としての集成的文脈性の創出が、現代のコミュニティにおける通時的活動にも原理的に適用しうるかを論じるため、まず本論第5節で定義したコミュニティに合致するとみられる個人の集合体での活動事例を提示したうえで、その特徴と第3節および第6節で提示した「場」的原理による関係生成の機能的条件との照合による考察

をおこなう。なお、本論では紙幅の都合から、各事例についてはまずその概要のみを提示したうえで、後の考察において必要な情報を補填するかたちで議論を進める。

《事例1》 都市型コミュニティとしての地域の居場所創出

坂倉（2010）は、自らが企画、運営に関わってきた「地域の居場所」としての「芝の家」を舞台とした新たな都市型コミュニティ形成の要因を考察している。坂倉の言うコミュニティとしての「地域の居場所」とは、「誰でも気軽に出入りでき、その場に集う人と自由に交流できる」地域の交流空間を指すが、「芝の家」もその一つとなるべく住民同士の相互扶助的活動を推進すべく東京都港区と慶應義塾大学の連携により実験的に設けられた。そこでは行政などの外部機関からの要請や私的利益の追求によらない「中間的」な領域で、任意の参加者により形成される「小さい」グループが随時おこなうかたちで、日々様々な交流事業が参加者の自発的な参画にもとづいて展開する。坂倉によれば、2008年の開設以来、「芝の家」への来訪者は増加し続け、その後の2年2ヶ月間の総来訪者数は延べ17,710人となった。

年齢、社会的背景、居住地域、さらには参加の目的や参加のスタイルまで多様な来場者同士のコミュニケーションの特徴は、特定の地域や属性に参加要件が限定されず、様々な目的をもちながら、専門分野や組織を超えて、緩やかな関係性がむすばれている点にある。そこでは、予め相手や条件を定めない偶然性にゆだねられた関わりあいがあるが、自然と成立していく。そうした活動の例として、地域住民と学生の混成グループによる花や野菜の鉢植えを地域の軒先に設置するプロジェクト、地域の健康づくりをテーマに専門家も参画してワークショップを展開する企画、高齢者を巻き込んだ地域のソーシャルメディアづくりなどがあり、それらを通じ来場者同士の関係が深まっていく。

坂倉は、そこにみられるグループの自発的な形成を促す要因として、①居住地、個人の属性、コミットメントの度合いなどに縛られない「弱い靱帯への開かれ」による多様性の許容、②来場者や関係者による紹介などを仲介とする間接的な「クラスター」型の関係構築による関心グループの拡大と自己生成の加速、③人間同士の本質的共感力に立脚した「根源的共同性」と潜在的に地域を共有するという「場の共同性」にもとづく、相互の尊重と地域の公益性への志向、の3つを挙げている。

《事例2》 まちづくりプロジェクトにおける内外の交流と自発的なコミュニティ形成

今日の地域活性化の手法として定着しつつある、当事者が主体となったコミュニティづくりをサポートする「コミュニティデザイン」の担い手として草分け的存在の山崎亮は、兵庫県家島諸島の一つである家島町で自らも関わった「いえしまプロジェクト」についてそのプロセスと成果を報告している（山崎, 2011）。過疎化の進む同町で、外部のひとりの学生によるフィールドワークから始まった活動は、島全体の再生プロジェクトへと発展する。はじめは学生グループによる「まちづくり研修会」を通じ、地元住民自身が町についての理解を

深めるとともに調査をおこなう学生らとの交流を進めた。さらに、彼らは自ら費用を負担するかたちで、外部者の視点から島の魅力を様々なメディアで発信すべく「探られる島」プロジェクトを立ち上げるが、これが外部の人に島の存在を認知させるだけでなく、島民にとってもそれまで意識されなかった島の魅力の自覚につながった。

その後、山崎らの呼びかけで設立された「まちづくり基金」をもとにした助成事業の一つとして立ち上がったのが、家島の「おばちゃん」たちによるテーマ型コミュニティとしての活動だった。彼女ら自身の提案でNPO法人「いえしま」として組織化することになるこのグループの主な活動は、地元の魚介類を使った特産品の加工と販売、その利益を使っての地域広報誌の復活、福祉タクシー事業の創設へと展開する。さらに、その活動は、首都圏や都市部のニュータウンへと敷衍し、「探られる島」からの島のPR冊子の配布や特産品販売を通じた交流事業へと発展する。山崎（2012）は、こうした活動における住民自身の試行錯誤を通じたゆっくりとしたプロセスが、地域コミュニティが主体性を取り戻すうえでは重要だと説く。また、人的要素を含めた自分たちの住む地域の魅力に気づいた住民たちが、普段どおりの姿をさらけ出して活動に参加するなかで育まれる、人どうしの有機的なつながりこそが、コミュニティデザインの最大の成果だと山崎は述べている。

《事例3》「まちあそび」としての山上のコミュニティスペース活用

山納（2016）は、自ら運営を始めた「コモンカフェ」⁹⁾に共鳴するかたちで、神戸市摩耶山上で「リュックサックマーケット」を定期的で開催してきた慈恵一の活動を紹介している。「リュックサックマーケット」とは、山納が六甲山の茶屋スペースを借りて始めた、出品者が山まで物品を担いで開くフリーマーケットの名称だが、慈もこれに倣い、2006年から月に一度摩耶山掬星台で開催してきた。慈は地域での活動を純粋に楽しみたいとの思いから、この活動をまちづくりではなく「まちあそび」と呼ぶが、これには以前まちづくり活動に関わった際に、関係者の合意形成や利害調整を「義務感から」おこなったことで自身が疲弊した教訓を受けてのことだった。マーケットでは、一般の登山客とマーケット目当ての客が入り交じるとともに、出品者どうしにもつながりが生まれるかたちでテーマ型コミュニティが形成されている。

一時期は参加団体が200組を超えるまでに拡大したリュックサックマーケットに、現地までの足となっていたロープウェイ廃止の危機が2011年に訪れるが、マーケットの参加者と、地元の婦人会や登山会といった地縁団体が中心となって組織した「摩耶山再生の会」による神戸市への働きかけにより、ロープウェイの存続が決定された。さらに、慈を中心に、ロープウェイまでのアクセスバス路線の設置や、山上の駅舎内に、ブックカフェ、ウクレレ教室、料理教室などのイベント活動のためのスペース「星の駅」を立ち上げた。

慈によれば、リュックサックマーケットでは、初めての参加者が毎回3割ほどいる一方、毎月そこで会うのを楽しみに上がってくる参加者も多いという。

以上、近年報告された、地域における自律的な活動の展開がみられる3つの事例の概要を提示した。これらの活動領域はいずれも、一定の地理的範囲を起点とし、関与する個人の自発的な参加により成り立つとともに、協働的活動を通じ全体および小グループ内で何らかの生活領域の共有としての共同性が醸成されているとみられる点で、先に提示した本論でのコミュニティの定義に合致している。以下で、これらの活動集団における関係構築のあり方が、「場」的原理による関係生成の特徴とどの程度整合しうるかを、先に挙げた同生成プロセスの特徴と照合しながら考察していきたい。

まず、集団における「場」を介したマクロな秩序の自己組織の存在を同定するうえでの十分条件として清水が措定した、即興劇の役者としての個人のふるまいが統合され、集団全体としてのストーリーである文脈性が歴史的、すなわち通時的に展開していく事実の存否を見ていくことにする。事例1の「芝の家」では、小規模のプロジェクトが次々と自然に立ち上がり、個人どうしが偶然性に支配されるかたちで関係性を深めていく。山納（2016）の観察によれば、そうした「芝の家」という場所を支えているのは、特定の人物、ルール、マニュアルではなく、「この場で生成された価値観や文化」であり、「そこで自発的に生み出された役割」（p.82）である。ここには、成員の部分的な入れ替わりはありうるものの、「芝の家」という場所での様々な実践の蓄積が醸成するコミュニティの文化としての文脈性が息づいているといえる。それは個人の属性やコミットメントの度合いにかかわらず多様性を許容する寛容さであり、そこでの出会いを通じむすばれる個々の関係の尊重と、それにもとづく日々の営みの流れをコミュニティとして受容し、その歴史のなかに位置づけていくことへの共通の理解である。

同様に、事例2では、外部の者の働きかけを契機として立ち上がった島の魅力の発信プロジェクトではあるが、いったん自分たちの島の魅力に気づいた島民たちは、特産品の加工販売から島内の福祉事業、さらに外部との交流事業へと試行錯誤を重ねながら自発的にコミットし、外部の参加者を巻き込んで新たな島の歴史を協働的につくっている。

事例3においても、一人のキーパーソンによる摩耶山をめぐるプロジェクトの立ち上げに共鳴するかたちで、やはり地元住民と外部からの参画者が「まちあそび」をコンセプトとして楽しみながら自発的に活動に関わり、様々な活動を新た生み出している。そこでの主催者の役割は「場を使いやすく整えること」（山納, 2016, p.64）であり、山という場所の共有を通じ「ほったらかしにしておくとうまく場ができてしま」（山納, 2016, p.65）うプロセスを共有することである。そうしたなかで生まれた関係者間のマーケットという場所への愛着は、市政を動かすまでの運動に発展した。そこでは、個人として楽しみながらも、「みんなの楽しみ、みんなのためになること」（山納, 2016, p.66）という公共性を志向する統一した意識の流れが生まれている。

ここに見てとれるのは、いずれの事例においても、活動のヴィジョンはあっても、発足時点では主催者を含む何らかの統御主体により設定または予期された展開についてのシナリオは存在せず、偶発性を容認するかたちで全体の活動が展開している事実である。この、即興的に進むコミュニティ活動のなかで、個々の参画者たちは、活動へのコミットメントの違いはあれ、

自発的にそれぞれのおかれた状況にもとづいた役割を担いながら他の参画者との協働的關係を構築していく。そうした個人および個人どうしの連携を起点とする活動は、局所的な関係生成の枠組みを超え、活動体としてのコミュニティの文化、価値観、公共性への志向といった、包括的なまとまりを生んでいる。このことから、これらの事例において、清水のいう「場」による秩序の自己組織の存在同定のための十分条件としての、全体的文脈性の歴史的創出が起きていると見なすことができる。

次に、コミュニティの文脈で実際にどのようなかたちで「場」による関係的秩序の自己組織が起きているのかを検討するため、「場」的原理による包括的關係生成の必要条件として先に提示した4つの項目ごとに、これらの事例との整合性をみることで、同原理による関係生成の内包的特質の同定を試みたい。まず、①の他者との対等性に立った個人による行為の選択権については、いずれの事例でも参加の有無を含め、基本的に自己の責任のもと個人の意志で行為が決定され、協働行為においても一定の指示・連絡体系は存在しうるものの、コミュニティにおける規範の遵守はあくまで個人の意志によりなされていると考えられる点で、特定の権力構造により一元的に参画のあり方が決定されることのない「緩やかな」関係性のもと、相互にフラットな関係での参加体制が維持されていると見なせる。

次に、②の個人のふるまいの他との整合と、それを通じた全体表現への寄与については、その具体的様態の看取は現場においてのみ可能なもの（河野, 2017）ではあるが、それぞれの参画者が、関わっているプロジェクトや小集団単位での活動のなかで、その目的自体を協働的に設定し、そこでの自己の役割を、他者との関係性を含む状況的要因や他者との相対による潜在的な貢献度の判断にもとづいて、定義、調整していることが推察される。そこには、活動内容についての「試行錯誤」（事例1）や、自発的な役割の定義（事例2）を通じ、参画者間の役割調整とその結果創出された全体的文脈性についての認識の共有がなされている。事例3の慈が、イベント数が増えた一方、「分散してきたのか、（全体の状況が）落ち着いてきています」（山納, 2016, p.65）（括弧内加筆は筆者による）、と語っているのは、そうした参加者間の関係調整が進んでいる様子を表したものと見える。

では、④の活動の方向性の当事者としての内面化についてはどうか。各事例で、参画者はコミットメントの度合いの差はあるものの、各自の役割把握にもとづき、協働的に何らかの実践に関与し、そのプロセスで本節での十分条件としての文脈形成についての考察で述べたコミュニティとしての文化の生成に参画することとなる。そうした文化的文脈性は、他の参画者との活動の共有を通じ各自の中で確認、強化され、その後の行為の方向付けの契機となっていると考えられる。実際、事例2では活動を通じ、家島を「第二のふるさと」と考える外部からの参画者が増えるとともに、住民たちの主体性も育っている（山崎, 2011）。このことは、事例1と事例3においても、ある場所を起点として各種のプロジェクトが参画者の協働により持続している事実とその証左を見て取ることが可能だが、特に「事例1」の芝の家では全体の運営の中心となるスタッフが日々朝と夕に話し合いをもつことで、状況把握と活動についての思いの

共有がなされ、それが「場を再現性あるものにし」(山納, 2016, p.82) ていることは興味深い。さらに、事例3の摩耶山での活動では、参画者の中に単なる楽しみの追求から、「みんなの楽しみ、みんなのためになること」をまなざす公共性の志向への意識転換が起きている(山納 2016, p.66)。こうして、これらのコミュニティ活動に継続的に参画する個人間には、共通の場所を起点とした協働的行為を通じ、一定の共同性が醸成されるとともに個人に内化され、それが活動の意味と方向性の当事者の把握につながっているといえる。

最後に、③の参画者間の身体性に立脚した情報の授受が、コミュニティの文脈においていかに起きうるかをみていきたい。先に触れたとおり、筆者が「場」的原理による関係生成のコミュニティの文脈への適用にあたり、その適否の判断上もっとも煩慮したのが、共時的に物理的空間を共有していない個人間いかに身体性を介した「場」の情報の共有の図式を想定するかであった。すなわち、集団の構成員のうち一定数の交替が生じうる通時的な集団活動の展開においては、「場」の情報の授受と共有を司る直接的な間身体的コミュニケーションが担保されない状況が定常的に存在する。こうした非同期的な接触状況にあっても、身体性に依存する非記号的情報のやりとりは可能となるのかについて検証が必要となる。

清水自身はこの「場」生成における空間的要因および共時性について体系的な議論はおこなっていないが、生命要素の集団の特質である動的協力性が、人間社会のレベルにも存在しうることを次のように述べている。

この動的協力性は人間の集まりにも存在するので、直感的な理解が可能です。大勢の人間の集合に秩序が求められ、人々が一定の秩序のある社会をつくると、自然に、その秩序を維持・発展させていくルールができ(秩序の場に相当)、その社会の要素である個人の行動を束縛し、共同生活に耐えるものとします。そして人々は社会の秩序を発展させるという働きを通じて互いに協力しあうわけです。全く顔を知らない人々の間、遠く離れたところにいる人々の間にも、秩序をつくるという行動を通じて協同性や連体性が生まれます。(清水, 1990, p.248) (括弧内は原著者による)

ここで、時間的、空間的に一定の幅を持つ社会活動において、「場」を介した包括的關係性としての集合的秩序の生成と維持を取りもつ媒体として、清水は「ルール」を挙げているが、ここでいうルールとは、集団全体に秩序の方向性を生み出すための個人のふるまいへの拘束条件であり、形式化された規則の体系ではない。清水(1996)によれば、この拘束条件自体は意識化されない操作情報であり、実際にはそれは個人により「場所」のイメージとして自覚されるものである。具体的には、ある場面を支配する雰囲気や空気、印象といった感覚的、情意的意味性を伴った総体的な状況認知の内容がこれにあたる。「場」の情報が身体性を介して伝達されるとする所以がここにある。では、物理的空間と、共時的時間を共有していない個人の集団に「場」による拘束条件を生成するメカニズムとは、どのようなものか。

今田（1986）は、人間社会において意味や規則の体系が構成員としての個人に内化される際、それは社会の「内部イメージ」としてなされるのだとする。この内部イメージとは、個人が独自につくり上げる「具体的な行為によって学習された社会の仕組みないしメカニズムにかんする」イメージを指す（p.235）が、それらはしばしば言語化されない「暗黙知」として個人内にストックされ、体系化される。今田によれば、行為者はこの内部イメージに従って社会的状況を認識、評価するとともに、自己のおかれた状況や他者の行為が自らの内部イメージと矛盾するとき、自己か他者のそれを変える以外に、相互にそれらを調整し合うという変換作業をおこなうこととなる。個人の持つこの内部イメージはもともと社会システム全体の様態を反映したものが、個人の行為がおこなわれる生活実践のレベルと、システム全体の秩序とのあいだには相互のフィードバックが存在する。すなわち、実践レベルでシステムの構造・機能・意味の各側面にそれぞれ対応する慣習的行為・合理的行為・自省的行為のあいだの螺旋運動として展開する個人の実践行為は、多数の行為者間で同期し、システム全体の秩序としての大きな螺旋運動となっていく（p.287）。

つまり、今田の論理にしたがえば、社会システムの自己組織では、暗黙知のかたちで個人内に蓄積された社会についての内部イメージが、行為を通じた相互の交渉と調整を経て共有され、これがシステム全体としての秩序を再生産するとともに、この更新された社会状況は個人に新たな社会の内部イメージを与えるという、循環的プロセスが存在することとなる。これは、「場」の作用を通じ個々の生命要素の内部に生成する「場所」（システム）のイメージにもとづいたふるまいが要素間で整合的となり、ふたたび全体の文脈である秩序を形づくっていくという、清水のいうホロニックループの原理そのものである。今田がここで暗黙知¹⁰⁾として言及するものとは、法体系などの形式知の根底にあって日々の実践を支えている経験知と考えてよい。言語化のきかないこの経験知は、実際のコミュニティにおけるコミュニケーション行為を含めた実践行為においては、事象の知的把握と並行して、感覚や情意などの非記号的チャンネルを通じ体得され共有されているはずである。

具体的には、そうした暗黙知は、個人間で局所的におこなわれる言語行為を含むコミュニケーション行為を通じ間身体的に伝播、共有されうる（山口, 2002）が、それはさらに、コミュニティにおけるさまざまな協働的実践行為のなかで取り交わされるコミュニケーションの場へと敷衍、浸潤し、ある種のハビトゥスや型として学習され、再生産されることでコミュニティの共同知として受け継がれていく。これは特殊技能の習得といった限局された学びではなく、実践の共同体内への定位であり、社会的身体の体得（福島, 1995）である。さらに、そうした経験知は、対面状況以外にも、各種メディアを通じた言語や他の象徴的記号表現を介して、間接的にはあるが高度なレベルでの共鳴現象を個人間に引き起こしうる（市川, 1992）。ここに、コミュニティにおける、身体知としての暗黙知による通時的状況での情報伝達と、それを通じた集合的秩序としての文脈の形成を措定するための、論理的根拠が見いだされうるのである。

この、コミュニティにおける通時的にはたらく情報伝達の身体的側面は、上の各事例ではどのように機能しているのか。事例1では、「芝の家」スタッフによる日々のミーティングを通じた状況把握と感情の共有がなされ、そうした実践の積み重ねが「この場の空気をつく」（山納, 2016, p.78）ことに貢献している。この暗黙知としての「空気」は、その場で活動をおこなう参画者にも浸透し、コミュニティについてのそれぞれの内部イメージを形成すると考えられる。さらに、「クラスター」状に広がる活動の輪は、分岐しながらも言語を含む様々なチャンネルでこの場所の魅力の伝達・共有に寄与していると想定される。同様に、事例2 n「いえしまプロジェクト」と3の「リュックサックマーケット」においても、外部からの参画者を含め、局所的に起きる参画者間の接触を通じ、プロジェクトの文化的コンテキストが、明確には言語化されない思いや感覚として共有されるとともに、様々な参画者の関与により、コミュニティ全体のあり様も変わっていく。実際、事例2の活動の中心的存在である「おばちゃん」たちは、視察者一行をも「カラオケに連れ込み、「普段どおり」でありながらオープンなコミュニケーションの場を提供する。その魅力にとりつかれた訪問者たちは、また「おばちゃん」たちに会いに島を再訪する（山崎, 2012）。こうした直接的な接触以外にも、様々なメディアを通じた島のプロジェクトのPRは、その雰囲気を外部に伝え、個人の中に島でのコミュニティのイメージを形成する契機となる。

事例3では、マーケットという対面コミュニケーションの場での様々な立場の個人どうしのやりとりを通じ、局所的なレベルで暗黙知の共有がなされるとともに、参画者たちは「まちあそび」をコンセプトにした実践から、コミュニティ全体に共有される緩やかな連携を体感として受け止め、実践に反映させていくとともに、個人のふるまいに埋め込まれたコミュニティ文化は局所的なコミュニケーションにも反映され、他者とのやりとりを通じ自己のうちに映し出されたコミュニティのイメージとして新参者にも分有、伝承されていく。

当然ながらこうしたコミュニティのイメージは、実際に訪れることで個人内で一定程度修正されるが、そこには現地での経験を通じ新たな意味が加味され、他の参画者のイメージと交錯しながらコミュニティの新たな文脈形成に取り込まれていくであろう。ここにも、その場面ごとに個人内に立ち上がる場所のイメージを核とした、コミュニティの内部イメージが生成され、参画者間で繰り返される相互作用を通じ、調整されながら相互に整合した新たなコミュニティのイメージへと収斂していくと考えられるが、このイメージの再生産のプロセスを取りもつのは、やはり身体性に基礎づけられたイメージ生成のメカニズムであろう。

8. 結論

本論では、現代のコミュニティにおける包括的文脈形成と、「場」的原理にもとづく生命システムにおける自律的な秩序生成との接合可能性を検証すべく、同原理の適用が想定される事例を参照しながら、両者の原理上の整合性を検討するとともに、各事例での同原理の具体的な作用の態様について考察した。その結果、前者の非同期的な状況においても、後者における十分

条件としての集合的文脈性の歴史的創出が自律的になされることが示された。また、同原理による秩序生成の必要条件としての主要な機能的特徴がいずれの事例にもみられることから、コミュニティの文脈における、「場」的原理による自律的關係生成としての集合的文脈性創出の指し示への理論的根拠が示された。

今後、コミュニティの自発的形成について「場」的視座からの研究をおこなうにあたり重要となるのは、成員間の關係生成のプロセスをいかに記述していくか、その方法論の設定である。先述したとおり、筆者は、これまでそうした「場」を介した關係性の様態を内部者としての視座から記述すべく、局所的な「場」の生成が起きているとみられる状況を対象として実地調査をおこなってきた。今後、コミュニティについても、本論で指し示した「場」的原理の適用可能性を理論的準拠枠として同様の調査を進めていく際に、局所的な状況にはない、様々な物的および心的要因が変数として關係生成に影響すると考えられる。それらをどう扱い、どう記述に取り入れていくかが大きな課題となるであろう。

その方法論の構想にあたって、対象となるコミュニティを、「実践コミュニティ (Community of Practice)」として想定したアプローチが有力なヒントを与えてくれると思われる。「実践コミュニティ」とは、レイヴとウェンガー (Lave & Wenger, 1991) が提示した、徒弟制などにみられる、技能や知識の学習が共同の場での行為を通じておこなわれる集団を指すが、そこでの実践のあり方とは、「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation)」と表現される、コミュニティの十全な構成員としての参画を目指し、まずは正当な参加を認められた初心者としての立場から、実践行為を通じてコミュニティ全体のあり方やそこで必要な技能やふるまい方などを学び取っていくというかたちをとる。

ここには、暗黙知の共有を含め、行為者としての参画者の身体的側面が密接に関わっていると考えられるが、われわれの日常の至る所に存在するこの実践コミュニティにおける「実践」とは、単にブルデュー (Bourdieu, P.) がいうような模倣により身体化される実践ではなく、社会制度の適用や行為の意味の交渉と了解のプロセスも含んだ、「個々人の異なった目的や動機が交錯しながらも、活動が協働的に維持される集合的な過程」(田辺, 2003, p.130)としての協働行為である。田辺 (2003) は、そうした実践コミュニティにおける構成員たちの行為のあり方そのものに着目し、そこに見られる一定のレパートリーと、その構成員間の關係性と の 連 関 などをエスノグラフィックに記述している。そこには世代間の矛盾と葛藤を伴いながらも、一方では可変的で自由度をもった権力構造が存在し、個人が共同の場での実践を通じてそこでの処世や熟達への知識と技術を身につけていく様子が、克明に記録されている。そうした個人によって「選択され実践される知識はコミュニティというグラウンドを媒介にして、初めて可能となる」(p.217) という。

実践コミュニティとしての現代のコミュニティにおける關係生成様態の記述は、そこで展開する様々な単位での実践の実像を描出することと切り離せないが、具体的にその実像、はコミュニティという場所と個々の参画者との關係性、および参画者間の關係性が規定する行為の意

味を明らかにすることで示すことができると思われる。実践は「コミュニティという社会関係の中においてはじめて具体的な意味を持つてくる」(p.220)のである。しかもその「意味」は、構成員により共有された規則を参照基準として社会の内部イメージとなって個人の意識に反映される情報であるため、「観念的でも主観的でもない」(今田, 1986, p.237)。この、個人がそれぞれの個性にもとづいて生成するコミュニティに関する内部イメージと、その統合のプロセスを記述していくことで、コミュニティにおける自律的な関係生成としての文脈形成の様態は記述可能となるとと思われる。そのことにより、これまでの「場」の作用の結果として産出される関係性や創発的行為のみの記述から一歩進み、その生成プロセスが記述可能となり、通時的状況における同原理による関係構築のあり様を明らかにする研究成果が見込まれる。

本論では、コミュニティの文脈への「場」的原理による関係生成論理の適用可能性と その具体的なあり方につき、二次資料としての文献由来の情報を参照して考察をおこなったため、その実相を詳説するだけの情報を欠く点で課題が残った。今後、筆者自身による実地調査を通じ、量と質の両面で充実したデータにもとづいた研究につなげたい。

【註釈】

- 1) コミュニティ研究の先駆者であるMacIver (1917) は、一定の空間的範囲をもつという地域性と、成員の共同体感情の共有にもとづく共同性が存在することの2点をコミュニティの成立要件として挙げている。
- 2) 本論で扱う自律的な関係生成原理としての「場」とは、第3節でも述べるように、集団を構成する要素が、その集団におけるマクロな秩序としての文脈性を創出すべく、自己のふるまいを決定するうえで準拠する拘束条件と捉えうるが、そうした拘束条件を、統御主体としての何らかの上位機関からの指令によらず、相互の協働にもとづいて生成する能力を有するのが生命要素の特質の一つである(清水, 1996, 1999)。こうした自律的な関係生成と文脈創出は人間が構成する集団にもみられるが、このことは、集団が共有すべきビジョンを示し、全体の活動のファシリテーションをおこなうというリーダーの役割を排除するものではない(清水, 2000; 野中・紺野, 2000)。
- 3) 人間社会におけるこの具体例として清水(1999)は世論や雰囲気을挙げている。(p.52)
- 4) 清水は行為や意志を起こす主体となる自我的自己である自己中心的自己(局在的自己)と、他者の無意識的領域と融合して共有された場所(状況)的領域に生成する自他非分離的自己(遍在的自己)という、自己の二重構造を想定し、「場」の共有は後者による自他非分離的作用によるものとした。
- 5) 清水はこうした自己の性質を変えながら協働的にマクロな秩序形成に参画する生命要素を「関係子」と呼ぶ。
- 6) 今田(1986)はこうしたゆらぎを通じた自己組織を流行現象を挙げて例説している。すなわち、バイアスのかかったゆらぎとしてのある個人の斬新な行為が、はじめはランダムな試行に見えても、それに同期する個人が現れることで自己触媒作用が起き、流行が現実化する。かくして、サイバネティックなシステムでは安定維持のうえで好ましくないとされるこのゆらぎは、シナジェティックな自己組織性ではシステムに方向性を持った創発要因となる。
- 7) MacIver (1917)によれば、具体的には、コミュニティの成立には、自他の区別なく不可分な統一体のはたらきに参画しているという「われわれ感情」、コミュニティにおける自己の位置づけの自覚を反映した「役割感情」、コミュニティへの物的および心的な依存である「依存意識」の3要素が

- らなる「コミュニティ感情 community sentiment」が関わっている。
- 8) 船津・浅川(2014)は、このほかにインターネットなどのサイバー空間で形成される「情報コミュニティ」を新たな形態のコミュニティとして提示しているが、本論では物理的な地域性を伴って展開するコミュニティ活動に限定して議論する。
- 9) 山納は、共通の関心や趣味をもつ人々を主な対象として、既存の飲食店の店舗を利用し任意のテーマのもと日替わりで店主が交代するかたちで運営される空間を「コモンカフェ」と呼ぶ。同業態のカフェではさまざまなテーマに合わせて、共通の関心を持つ利用客の間に緩やかなつながりが生まれている。
- 10) 暗黙知とは元来ポラニー (polanyi, 1966) の提唱した、事象の認知を支える非記号的方法知を指す。
- 11) 河野(2011)では、ワロン (Wallon, 1956) などの言説から、イメージ生成には内受容感覚を含む身体性にもとづく情意の発現が深く関わっていると論じている。

【参考文献】

- 伊丹敬之(2005)『場の論理とマネジメント』東洋経済新報社
- 市川 浩(1992)『精神としての身体』講談社
- 今田高俊(1986)『自己組織性 社会理論の復活』創文社
- 今田高俊(1994)『混沌の力』講談社
- 今田高俊(2005)『自己組織性と社会』東京大学出版会
- 河野秀樹(2010)「〈場〉とはなにか―主要な理論と関連する概念についての学際的考察」『目白大学人文学研究』6, 39-60.
- 河野秀樹(2011)「共空間内〈場〉生成過程における身体性の性格と機能についての理論的考察」『目白大学人文学研究』7, 37-59.
- 河野秀樹(2012)「異文化間における共創的關係の自己組織：在米日本人へのインタビュー調査からの考察」『異文化間コミュニケーション』15, 71-92.
- 河野秀樹(2017)「『場』による関係生成プロセスの記述における一人称的記述としての『エピソード記述』の有用性に関する考察」『異文化コミュニケーション』20, 187-198.
- 河野秀樹(2018)「集団参加型イベントにおける『場』的原理による関係生成様態：一人称的記述の実践事例からの考察」『異文化コミュニケーション論集』16, 65-81.
- 坂倉杏介(2010)「地域の居場所からのコミュニティづくり：芝の家の『中間的』で『小さい』グループ生成を事例に」『慶應義塾大学日吉紀要. 社会科学』21, 63-78.
- 指出一正(2016)『僕らは地方で幸せを見つける』ポプラ社
- 柴田久(2017)『地方都市を公共空間から再生する』学芸出版社
- 清水博(1990)『生命を捉えなおす 生きている状態とは何か 増補版』中央公論新社
- 清水博(1996)『生命知としての場の論理 柳生新陰流に見る共創の理』中央公論社
- 清水博(1999)『新版 生命と場所 創造する生命の原理』NTT出版
- 清水博(2000)「共創と場所:創造的共同体論」清水博編『場と共創』(pp.23-178) NTT出版
- 清水博(2003)『場の思想』東京大学出版会
- 田辺繁治(2003)『生き方の人類学 実践とは何か』講談社
- 露木恵美子(2003)『場と知識創造』北陸先端技術大学院大学博士論文
- 中村真広・村上浩輝・ツクルバ(2017)『場のデザインを仕事にする』学芸出版社
- 西口敏宏・ポーテ, A(2000)「場と自己組織：アイシン精機火災とトヨタグループの対応」伊丹敬之・西口敏宏・野中郁次郎編『場のダイナミズムと企業』(pp.97-124) 東洋経済新報社

- 野中郁次郎・紺野登（1999）『知識経営のすすめ ナレッジマネジメントとその時代』筑摩書房
- 野中郁次郎・紺野登（2000）「場の動態と知識創造：ダイナミックな組織知に向けて」伊丹敬之・西口敏宏・野中郁次郎編『場のダイナミズムと企業』（pp.45-64）東洋経済新報社
- 広井良典（2009）『コミュニティを問いなおす つながり・都市・日本社会の未来』筑摩書房
- 福島真人（1995）『身体の構築学 社会的学習過程としての身体技法』ひつじ書房
- 船津衛・浅川達人（2014）『現代コミュニティとは何か』恒星社厚生閣
- 松本通晴（1975）「マッキーヴァーのコミュニティ概念の展開」マッキーヴァー, M. 著 中久郎・松本通晴監訳『コミュニティ』（pp.496-507）ミネルヴァ書房
- 三輪敬之（2000）「共創における生命的コミュニケーション」清水博編『場と共創』（pp.273-338）NTT出版
- 山崎亮（2011）『コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる』学芸出版社
- 山崎亮（2012）『コミュニティデザインの時代 自分たちで「まち」をつくる』中央公論新社
- 山口一郎（2002）『現象学ことはじめ 日常に目覚めること』日本評論社
- 山納洋（2016）『つながるカフェ コミュニティの〈場〉をつくる方法』学芸出版社
- Lave, J., & Wenger, E. (2016). *Situated learning: Legitimate peripheral participation*. New York: Cambridge University Press.
- MacIver, R. M. (1917). *Community, a sociological study: Being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life*. London: Macmillan.
- Polanyi, M. (1966). *The tacit dimension*. 高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房
- Wallon, H. (1956). *Rapports affectifs: les emotions*, H. Wallon (Ed.). *La vie mentale*. Vol. VIII

（平成30年12月21日受理）

